

三木一彦 著

『三峰信仰の展開と地域的基盤』

古今書院 2010年2月

225頁 4,600円+税

今回、紹介させていただく『三峰信仰の展開と地域的基盤』は、2007年度に、三木一彦氏が筑波大学に提出した博士論文「近世中・後期における三峰信仰の展開とその地域的基盤」に修正を加え、改題したものである。

本書は、関東甲信地方で広く崇敬される埼玉県秩父地方の三峰山に注目し、近世に、その信仰が各地域に浸透した社会的・経済的要因を、「日鑑」や奉納などに関する寺務記録、参詣記録、石造物をはじめとする多くの資料の分析を通して、歴史地理学的視点から明らかにしたものである。

本書の構成は以下の通りである（項は省略）。

第I章 序論

第1節 宗教地理学研究の現状と課題

第2節 本書の目的と視点

第3節 本書の方法

第II章 三峰山と三峰参詣

第1節 三峰山の沿革と組織

第2節 三峰参詣の様相

第3節 小括

第III章 三峰山の基盤確立と大滝村

第1節 木材生産の進展と三峰山

第2節 秩父地域における基盤確立と大滝村

第3節 小括

第IV章 秩父地域における諸信仰対象と三峰山

第1節 秩父地域における三峰信仰の性格

第2節 秩父郡大野村における信仰集団

第3節 小括

第V章 関東平野における三峰信仰

第1節 村落部における三峰信仰の特性

第2節 武蔵国東部における三峰信仰

第3節 小括

第VI章 江戸における浸透とその社会的背景

第1節 檀廻と奉納

第2節 問屋仲間と三峰講

第3節 小括

第VII章 結論

第1節 総括

第2節 本書による知見

第3節 課題と展望

それでは、本書の内容について若干の私見を交えながら紹介させていただくこととしよう。

第I章「序論」において、著者は最初に、民俗学・宗教学・歴史学などの研究成果をもとに、江戸時代の山岳信仰を研究対象とする意義を述べている。そして日本の宗教地理学に関する先行研究を、都市・村落景観と宗教、巡礼、宗教分布の3つの観点から展望している。その中で、著者は金子直樹による信仰圏研究に関する指摘をふまえつつ¹⁾、日本の宗教地理学が抱える課題として次の2点を示している。

- ・信仰圏研究は、信仰圏の空間構造の把握にとどまっており、現実の信仰圏が各地域の事情・地域間交流のあり方を反映して複雑なものとなるという観点で分析をしていないこと。
- ・特定の信仰対象（寺社・山岳など）の側に焦点を当てた研究が多く、それぞれの地域がいかなる要因によって信仰を受容したかについて、ほとんど検討していないこと。

第II章以降、著者は上記の課題を念頭に置きながら、三峰信仰が庶民の間に浸透し、現在の信仰の基礎が形づくられた近世に注目し、三峰山とその山麓周辺、秩父地方、関東平野、江戸の各地域における三峰信仰の展開について論を進めている。本論の内容紹介に入る前に、ここで、本書の特徴について少しだけ述べておきたい。それは、著者が三峰信仰の受容の要因を、宗教者の布教活動だけではなく、上記の各地域の産業・立地条件・交通条件・世論・崇敬者の属性・職縁による人脈など、実に多くの点に求めているというところである。これは、従来の宗教地理学的研究においては、ほとんど確認できない視点である。

さて、第II章「三峰山と三峰参詣」において、著者は三峰山の信仰史、近世における三峰山の運営組織の概要、そして三峰山参詣の様相について述べている。三峰山は、相模大山や榛名山と比べて「霊山」としての成立が遅れ、18世紀に入るまで、その霞は狭小なものであった。しかし、著者は、寺務記録や「行者堂勧進帳」の分析から、19世紀に入る頃には、三峰山が参拝者・参籠者・講の数を著しく増加させていたことや、信仰圏を関

東甲信地方にまで拡大し、関東地方の一霊山としての地位を獲得していたことを明らかにしている。さらに、19世紀の参詣記録や寺務記録より、当時の人々が、三峰山に多様な現世利益を求めたり、三峰山と他の寺社とを組み合わせる参詣したりする一方で、三峰山側では参拝者を厚遇する体制を整えていた点など、当時、三峰山参詣を活性化させる要素が揃っていたことを示した。

続く第三章「三峰山の基盤確立と大滝村」で、著者は、三峰山山麓に位置する大滝村に焦点を当てている。17世紀半ば以降、大滝村は江戸に向けた木材の供給地のひとつとなり、林産業が活性化していった。これにともない、村内では山林資源の価値が高まり、百姓稼山・御林山の区別がなされるなど、その利用に関する規定が度々設けられた。これに加え、他所の商人が御用材伐出を請け負う、百姓稼山を購入するなどの積極的な活動を展開していた。著者は、このような状況に置かれた大滝村の人々が、山林資源に関する権利を守るべく結束を固め始め、それまで宗教的結合が希薄な彼らであったが、三峰山を鎮守・山の神一すなわち村の統合の象徴として位置付け、寄進を行うようになったことを明らかにしている。

その後、三峰山側では1720年の日光法印の入山を契機に、現在みられる信仰形態（御眷属拝借、関東・信濃方面の檀廻、山麓周辺域への年始回り）を確立したり、大滝村をはじめとする秩父郡の住民の信仰対象を三峰山山内に末社として勧請し、祭礼を執行したりするなどの運営上の工夫を行うことにより、秩父地方一円で崇敬をあつめるようになった。

だが19世紀に信仰圏が拡大すると、三峰山側と山麓の住民との間の関係は希薄になり、両者はしばしば対立するようになる。著者はこの様子を、住民側が三峰山発行の道中記の記載内容に関して三峰山側を訴えた書状、あるいは、三峰山側が住民の山内での問題行動（境内での商業行為・木材の無断伐採など）を批判した記録や訴状の内容を分析することにより明らかにしている。

以上記したように、著者は、第二章・第三章を通して、大滝村が江戸の木材供給地となったことを契機に、三峰山を鎮守とみなし、経済的支援を行うようになったこと、そして、その信仰圏が当初は非常に狭小であったが、日光法印の入山後、

三峰山側の運営努力により秩父地方を中心に崇敬者を獲得し、徐々にこれを拡大させていったことを、多くの資料を提示しながら、実に詳細に述べている。

その中でも評者は、三峰山側が秩父地方の人々の信仰対象を山中に末社として祀り、彼らの参詣意欲を刺激していたという点にとりわけ興味を覚えた。一般に、他の山岳においては、山内の堂宇の設置背景については不明な場合が多い。また、これまでの宗教地理学では、本山・本社などの主要な宗教施設を分析対象とする傾向にあり、末社が地域社会にどのような影響を及ぼしたかについては、十分な考察がなされてきたとは言い難い。したがって、著者がこれらの点を実証的に明らかにしたことは、寺社運営を研究テーマのひとつとする宗教地理学や山岳信仰の研究にとって、非常に有意な成果だと言えよう。

また、信仰圏が拡大したことにより、三峰山と山麓の住民との間の関係が希薄になったという著者の指摘も見逃すことができない。それは、信仰圏の広さが、寺社とその周辺地域の人々との社会的関係を把握するための一般的な指標となり得るかにについて、今後、検討を重ねる価値が十分にあると思われるからである。

さて、第四章「秩父地域における諸信仰対象と三峰山」では、秩父地方で三峰信仰が他の信仰とともに受容されていた様子を、三峰山配下の一修験（吉田坊）の檀廻、大滝村の百姓山伏の日常の宗教活動、同村栃本の年中行事に関する資料の分析をもとに論じている。吉田坊は19世紀初頭に三峰山配下となり、その役僧をつとめた人物である。著者は、吉田坊や大滝村の百姓山伏が、秩父地方で三峰信仰を前面に押し出すことなく、おもに他の神仏を祀る形で宗教活動を展開していたことを明らかにした。また、大滝村栃本では在地の寺社の宗教者とともに、三峰山・伊勢・富士山などの御師の受け入れを行っていたことから、多数の信仰が併存していた。著者は、このような状況において、三峰山側では、大滝村内の集落や有力者世帯と季節の見舞いや有事の際のつきあいをしながら、村・家を対象とした檀廻活動を展開することにより、三峰信仰を定着させていたと結論している。

ここで評者は、吉田坊や百姓山伏たちが檀廻や

日常的な活動の中で、三峰山を祀る行為をほとんど行っていなかったという事実が非常に気にかかった。その理由とは何であろうか。本書では述べられていない三峰山の役僧・修験者による檀廻活動の全容とともに、この疑問が明らかにされることを期待したい。

第2節では、関東平野と秩父盆地の間に位置し、江戸との接点となった大野村を事例に、秩父地方における三峰信仰の特徴の解明を試みている。著者は石造物の分析を通して、大野村では18世紀半ばより、代参講を含む多くの信仰組織が存在していたことを指摘した。そして、このような現象が生じたのは、18世紀後期以降、同村で林産業が盛んになり、一般の村人が経済力を蓄えたことにより、既存の村組織の秩序が崩壊した結果、講員間の平等性を特徴とする代参講が成立したためだと論じている。また著者は、19世紀以降の大野村では、三峰山と密接な関係にあった大滝村の人物と炭生産を共同で行うなどの経済的交流がはかられたことから、大野村では三峰山を身近な霊山として位置づけるようになったと考察している。

第V章の「関東平野における三峰信仰」では、関東平野に視点を移し、村落部と街道周辺の集落における三峰信仰の特徴について明らかにしている。著者は「日鑑」などの記述を根拠に、18世紀の村落部においては、猪鹿除けが主な祈願内容だったが、以後、都市部で多くみられた火防・盗賊除けが、村落部でも徐々に祈願されるようになったと指摘している。その要因として、当時の村落部では貨幣経済の浸透、都市部への人口の流出などの現象が生じ、都市部との関係がより密接になっていたという社会的事情を挙げている。評者はこの点について、関東地方のいくつかの村落を事例として、たとえば、祈願内容、あるいは、三峰山側より授与された神札の種類が変化したことを示す資料などを用いて、三峰信仰が「都市的」な性質を帯びていく様子を経年的に表現できれば、より説得力を増し得たのではないかと考える。

第2節において、著者は、近世の三峰信仰の末社の分布と三峰山への寄進状況に関する分析をもとに、三峰信仰が武蔵国東部（埼玉郡・足立郡・葛飾郡）の宿場町とその周辺域において強固に浸

透していたことを示した。そして、この地域の三峰講には、村、あるいは町と密接に結びついている団体と、これを超越して組織されるものの2種類があると指摘したうえで、後者は街道・河川を媒介として信仰が定着し、成立したものだとは推察している。さらに著者は、日光道中の杉戸宿・千住宿周辺で組織された三峰講の特徴の把握を試みている。とくに千住宿に関する考察では、寄附金の奉納状況に社会的階層が強く反映されている氏子組織に対し、三峰講は加入が任意であり、その経済活動には平等性がみとめられるという点から、後者は既存の氏子組織・檀家組織などと比べ、村落の組織としての性質が希薄であったという結論を導いている。

江戸は三峰信仰の重要な経済的基盤のひとつであった。第VI章「江戸における浸透とその社会的背景」では、江戸の三峰信仰の特徴と、これが浸透した社会的背景について検討している。

18世紀後期以降、江戸では火防・盗賊除けの目的で三峰山が信仰され、参詣・講の結成・末社の設置が盛んになった。また、18世紀後期には、三峰山側が江戸で定期的に檀廻を行うようになり、著者は、その範囲を「山手檀廻記」・「下町檀廻記」などの資料をもとに地図化を試みている。これによると、19世紀前期の段階において、三峰山は日本橋・神田の町人をおもな檀家としながらも、武士や寺院にも布教を行っていたことがわかる。さらに著者は、上記の檀廻記録や「日鑑」の記述をもとに、江戸の商家が三峰信仰を本家・分家などのある他国に伝播させる役割を果たしていたことも指摘している。これまでの宗教地理学においては、信仰の伝播の「中継地点」に注目することはあまりなかった。今後、信仰の拡大について研究を進める際に、我々は、著者が示したこの視点を大いに参考にすべきであろう。

同業者講は、江戸の三峰信仰にみられる特徴のひとつである。第2節では、その中のひとつ、材木問屋をおもな講員とする豎川講に焦点を当てて、これが結成・維持された要因を考察している。豎川講は、江戸地廻りの民間材を取り扱う川辺一番組所属の材木問屋を統率者とし、19世紀前期・中期に、三峰山に鳥居・灯笼などを積極的に奉納した団体で、三峰山や江戸の社会に大きな影響力をもつ存在であった。ところが19世紀に入る

と、同業者の中に、材木問屋や仲買を通さずに取り引を行う者があらわれるようになり、従来の木材の流通経路にほころびが生じる。著者は、このような状況下において、堅川講が三峰山への奉納・参拝活動を行うことにより、緩みがちな問屋仲間の結束の維持・再生を図っていたと指摘している。評者としては、堅川講の人々がこの問題に直面した前後で、奉納以外の点で、彼らの信仰活動にどのような変化がみられたかについて（たとえば、三峰山への参拝頻度が変化した、講の規約が新たに設けられたなど）、当時の堅川講の内情を如実に示す資料の分析をもとに言及がなされれば、より興味深い展開になったと感じた。

第VI章の終盤に、著者は、堅川講の講員が江戸の大火により莫大な経済的利益を獲得し、世間から芳しくない評判を得る属性をもつがゆえに、彼らが「大火を期待していない」という態度を世間に示すべく、「免罪符」として三峰山の信仰を受容したと指摘している。これまでの宗教地理学では、信仰が定着した要因を検討する場合、崇敬者の精神状態に注目することはほとんどなかった。講員たちが世間に対して配慮したことが、信仰の受容につながったという著者の指摘は非常に興味深い。これは、今後、我々が信仰の定着過程について研究する際に、崇敬者を取り巻く社会的状況と、これにより形成される彼らの精神状態についても十分に検討すべきであることを示唆するものであろう。

先述のように、第VI章の後半部分において、著者は材木問屋を主な構成員とする信仰集団を事例として取り上げている。それでは、江戸に住まうその他の業種の人々、あるいは武士の三峰信仰には、いかなる特徴がみられたのであろうか。評者は、今後、この点について著者から何らかの言及がなされることを期待している。

最終章の「結論」では、以上述べた第I～VI章の概要とともに、本書の成果として三峰山信仰圏の様態、三峰講を通してみた江戸時代の特徴、各地域における三峰信仰の受容の背景についてのま

とめがなされている。そして著者は、明治期以降における三峰信仰の展開と他の霊山—とくに関東地方の霊山—との比較、日本の宗教の東西の比較、宗教と経済・社会との関係性に関する考察の4点を残された研究課題として掲げている。今後、上記の課題について、地理学的な研究が大いに進展することを評者も願う次第である。

さて、本稿を終えるあたり、資料上や物理的な制約を無視した発言とのお叱りを受けるかもしれないが、本書全体に関して2つだけ要望を述べておきたい。ひとつは、近世における各地の三峰信仰の受容状況をより深く理解するために、本書で示された檀家や講の分布範囲のほかに、関東地方全域における崇敬者の信仰活動（祈願内容・講の種類・授与された神札の種類など）の地域的特徴を経年的に概観し得る資料、あるいは、その分析結果を掲げて欲しかったということである。もうひとつは、近世の三峰山信仰圏の全容を把握するという意味で、甲信地方における三峰信仰の展開の経緯や特徴について言及した章を盛り込んで欲しかったという点である。

以上、三木一彦氏による『三峰信仰の展開と地域的基盤』の概要を紹介させていただいた。私の勉強不足や誤解による的外れな発言も多々あったかと思う。このため、本書がもつ魅力を十分にお伝えできなかったかもしれない。どうかご容赦いただきたい。兎に角、本書は豊富な資料の分析をもとに「江戸時代の関東地方という舞台の上で、三峰信仰がどのような姿をみせていたのか」（はしがき、ii頁）を我々に詳細に伝え、今後の研究に多くの重要な視点を提供してくれる、歴史地理学、宗教地理学、そして山岳信仰の研究者必読の1冊となったことは間違いない。

（筒井 裕）

〔注〕

- 1) 金子直樹「日本における信仰圏研究の動向—山岳宗教を中心にして—」人文論究45-3、1995、104-117頁。